"子どもは社会の宝"と、よく聞きます。そこに国籍はなく、日本に住む外国にルーツをもつ子どもも当然これからの日本社会を担っていく「社会の宝」です。

ただ、一言に「外国にルーツをもつ子ども」と言っても、親の国籍や言語、本人の生い立ち、学校や親の仕事と家庭状況等本人が置かれている環境も様々であり、それぞれの抱えている課題も様々ですが、今回は、愛知県犬山市で開催された若者を対象とした講座を通し、これからの子どもたちと社会のかかわりについて考えてみたいと思います。

外国にルーツをもつ若者たちから見た 外国人住民と日本社会との接点

JIAM多文化共生コーディネーター 加藤 純子

外国にルーツをもつ子どもiと日本社会のかかわりについて考えたとき、彼・彼女らの置かれている状況は様々だが、日本の小学校に行っていても、途中から来日したため、周囲の話している日本語がわからない、日常会話はわかっても教科書特有の用語、文章がわからず、勉強についていけない、というケースは必ずと言ってよいほど出てくる。さらには、外国人住民が多く住む地域で、外国人学校がある場合、学校では母国語で勉強し、放課後はその国の専門食材店でおやつを買い、家に帰れば衛星放送で母国の番組を見て、親との会話も母国語でいっさい日本語と接点がない、という子どもがいる。

「彼らの将来の夢は何だろう? スポーツ選手か、パイロットか、学校の先生か……」

以前、ある地域の公園で遊ぶ南米系の子ど もたちの姿を見てふと思った。

しかし現実は、夢とは遠い。



製造業に従事する外国人住民が多い地域の子どもたちの場合、就業年齢になると、工場労働者として働く場合が多々見られ、社会人になっても日本に住んでいながら日本社会との接点がないままの生活をすることとなる。

また、工場労働者以外の道へ進もうと思い、 勉強を頑張り、中学を出たとしても、高校受 験の壁、そして大学受験の壁にぶつかる。そ うなると、自分の夢を諦めざるを得なくなり、 結果的に自分の意志に反して限られた職業に 就かないと生活していけない、という状況で ある。

日常の日本語習得及び学習言語の習得の困難さ、母国との学習方法の違いや日本の教育システムの情報不足、進学の壁、学校文化への適応の困難さ、家庭内のコミュニケーション言語の相違等、彼らは自らの意志にかかわりのないところで振り回されやすい環境にいるだけに、抱える課題は多々あり、「多文化共生」という言葉が日本で使われだして15年以上経った今でも「社会の宝」である彼らが抱える課題は減らず、社会情勢の変化とともに年々複雑さを増してくる。

そんな中、彼らの状況がどんな状況であれ、 日本で生活している以上、これから少しでも日本社会に接し、夢を持って生きていけるため のヒントを学んでもらおうという趣旨で外国に ルーツをもつ子どもたちに向けて積極的な取り 組みをしている事例が愛知県犬山市にある。

今回は、この事例を紹介しようと思う。

「社会人基礎力」を身につける

愛知県犬山市は、愛知県の最北端に位置し、 人口75,829人の街である。市内の在住外国人 登録者数は1,832人で全人口に占める割合は 2.4%、国籍順では多い順に、フィリピン、ペ ルー、中国、ブラジル、韓国・朝鮮と並ぶ(平 成23年8月末時点)。犬山市の場合、国籍別の 人口で見ると特定の国に突出していないのが 特徴である。

今回取材にご協力いただいた犬山市多文化 共生推進員大島ヴィルジニア・ユミ氏による と、主にフィリピン人は日本人の配偶者、ペルー・ブラジル人は、製造業の工場労働者、 中国人は技能実習生が多いという。

今回紹介する事例は、平成21年より「社会 人基礎力養成講座」という名前で犬山国際交 流協会が企画し、国籍を問わず地域の若者向 けに開催されている講座である。

社会人基礎力とは「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が平成18年から提唱している。

犬山国際交流協会では、この理念に基づき、 講座を企画し、個々の基礎力の養成に加え、 フィールドワークをとおし自分たちの住む地 域との接点をもってもらう、という点を加え、 これまで様々な形で講座を開催してきた。

1年目は、市内を巡り、犬山市の「いいトコ」を見つけ、グループでPR作品を作り、観光協会へのプレゼンテーションをする、というプログラムで、3回に分けて行った。

2年目は、市内の歯科医を訪問後、歯科で使用する子ども向けの歯に関するパンフレットをグループで作成し地域の方々や親に発表した。

これら2回とも、「前に踏み出す力」「考え 抜く力」「チームで働く力」の3点を盛り込ん だ内容で、自分たちで考え抜いて人に伝える という行為に、参加者自身の中で自分に自信 をもてた子、発表会に来所した地域の方や親 なども感動され、好評だったようだ。

3年目の今年はフィールドワークをとおして 地域を知ることは同じであるが、挨拶、欠席 の連絡、時間厳守等日本社会で生きていくう えの最低限のマナーを身につけることに重点 を置いて自分たちで企画した。

講座は、8月下旬に2日間を使って行った。 具体的なプログラムは下記のとおりである。 〈1日目〉

- ・日本の社会人としてのマナー講座
- · 犬山城、城下町散策
- バーベキュー(2日目)
- · 陶芸教室
- スポーツ大会
- ・シュテちゃん(犬山市国際交流員佐々木ゼ ルマー・シュテファニー氏)の話(若者た ちに期待すること)

一見すると、マナー講座と国際交流員の方の話を除けば、遊びの要素が多いように見えるが、実際参加すると、集合時間を守る、グループで作業をする、自分のことは自分でする、ということを意識させるようプログラムはもちろん、運営スタッフが参加者とコミュニケーションを行う中でも随所に工夫が盛り込まれていた。また、「日本で生き抜くためには」というストレートな表現も随所で使い、単なるイベントで終わらせないという決意がうかがえた。

今回の参加者は4か国(ペルー、日本、ブラジル、中国)の10~30歳までの若者たち18名。なかでも、ペルーにルーツをもつ子どもが多く、彼らのほとんどは、母国で産まれて幼少の頃に来日したか、親が来日後産まれたか、という子であった。しかし、一部には、2、3年前に来日し、日本語は聞き取ることがで

きるが、話すのは難しいという姉弟もいた。

講座を取材する中で外国人住民と日本社会の接点について抱える事柄について考えさせられることがあった。



マナー講座開催の様子

ある1人の若者との出会い

初日、最初に出会ったのがM君(20歳)。彼はこの日弟(14歳)とともにセミナーに参加した。彼自身は、2日間、スペイン語の通訳ボランティアとしてかかわっていた。一昨年、昨年の社会人基礎力養成講座の参加者でもある。

講座の移動中、初対面の私に、今流行のタブレット端末で家族や自分の写真を見せ、目を輝かせながら自分の趣味や生い立ちの話など多くを語ってくれた。

M君は、日系ペルー人の父とペルー人の母をもつ。6人きょうだいの長男で5歳の頃来日し、日本の小・中・高校を卒業した。高校卒業後は、市内の高校で語学指導員としてスペイン語、ポルトガル語、英語の通訳を務め、その後静岡県浜松市でプレス工場に勤め、ホームページ作成会社の営業を経験した。

9月1日からは大手電話会社に就職が決まっており、2か月は試用期間だが、M君のがんばり次第で正社員になれるという。

彼と話をする中で、常に身だしなみについて気にするという話題になった。理由を聞くと、自分が営業の仕事をしている際、先輩に「日本人のお客さんは営業担当者の細かいところまで見る目が厳しいので身だしなみを清潔に

しないとダメだよ」と言われたとのこと。実際、いつもハンドクリーム、日焼け止め、制汗スプレーを持参していると話していた。

こういった部分は、「日本人と接する営業に かかわり、教えてもらわなければ自分は気が つかなかった」と言う。

さらに、語学指導員という、語学を活かす 仕事に就いていたにもかかわらず、その後、 なぜ工場に行ったのか、また、M君の周りの 友人たちはどのような道を歩んでいるのか聞 いてみた。

「自分の周囲の友達は皆工場に行く。それが 当たり前と考えているし、自分にやりたいこ とがあっても、親や周囲の人間に工場を勧め られる。また、知り合いが工場に行っている ので、働きやすい。何より、自分の周囲の人 たちは、通常の他の職業よりも、工場の方が 多く給料がもらえる、と勘違いしている。多 くもらっていそうに見えるが、結局間に派遣 会社があるので、それほど多くはもらえない。

工場以外の他の職業の場合、月々の給与が 工場より低くても、ボーナスが出る所もある し、保険ⁱⁱ等保障もしっかりしている。そうい うことを皆知らない。

自分も最初は周りと同じように工場に行っ て働きたいと思い、浜松まで行き、プレス工 場で仕事をしたが、工場では体力的にも精神 的にも辛かった。自分のやりたいことができ る時間もなく、体調が悪く休みたいときでも 派遣会社の人が自分の部屋まで迎えに来て引 き連れ出されたこともあった。だから、自分 には、工場は向かないと思い、その後はまっ たく違う仕事をした。営業の仕事は、体力的 には工場よりマシだったけど、自分は真面目 にやっていても勘違いされて日本人の上司に 怒られることもあり、いろいろ厳しい面もあっ た。今思えば勉強にはなった。僕は人と話す ことが好き。話すことによって自分の知識が 広がるのでこれからもっと視野を広げて、い ろんなことに取り組んでみたい」と自分の抱 負とともに語ってくれた。

今は実家にいて、弟や妹たちの世話をしているが、就職してお金を貯め、数か月後には自立して、一人暮らしをしたい、とさらなる自身の向上に意欲を出していた。彼の将来の夢はメディア関係で働くことだそうで、講座中、城下町でコミュニティFMの生放送に出くわし、皆の代表として率先してインタビューに答えていた(高校生のときは、ファッション雑誌に掲載されたこともあり、自分自身が注目されてとても嬉しかったとのこと)。

講座中、通訳をしながら、移動や作業すると きでも年下の子どもたちをリードしていた彼。

彼を以前から見ている大島氏は、「地域の子 どもたちのロールモデルになってほしい」と 彼に期待をしている。

彼自身、幼少の頃からこれまで様々な場面で苦労している中、自ら向上心をもって生活し、そして通訳という業務ながらも日本の大手企業に就職。さらには、友人とともに子どものための日本語教室を開催したい、という希望もあるそうだ。

大島氏に誘われて第1回目から講座に参加 しているM君。大島氏という相談相手がいた からここまでやってこれた、という部分もあ るだろう。



国際交流員の話に耳を傾ける子どもたち。彼・彼女らに期待する点について語られた。

少し背中を押してあげれば、日本社会と接 点をもち自ら積極的に進んでいける、という ことを、彼が教えてくれた気がする。

地域から日本社会との接点とセーフティ ネットについて考える

1日目終了後、その日参加した子どもたちのほとんどが住んでいるという、郊外の地域に行った。国道から少し外れ、犬山駅から車で15分ほど行ったところにある田園地帯が広がるのどかな場所に県営団地が立っていた。

その団地には、全世帯の内4分の1にあたる数の外国人住民世帯が入居しており、その約8割がペルー系の住民である。

団地に行くと、掲示板にある張り紙を見た。 それは、日系人と見られる方の名前が記載された葬儀の案内だった。葬儀の日付は既に過ぎていた。まだはがされていなかったのだ。

一緒に行った大島氏に様子を聞くと、1週間ほど前にこの団地の一室で日系ペルー人の中年男性が亡くなっているのが発見されたという。

男性には家族がいたが、家庭内のトラブルから離婚しており、単身暮らしの状況で、死因は自殺と判断された。亡くなってから発見されるまで2週間ほど経っており、近所の住民から様子が変だということで通報されたそうだ。

この例は、何も個別の事例で留まるものではない。よく高齢者の孤独死が話題にあがるが、外国人住民の場合もそれと似ていて、周囲の環境の影響もあり、今回のようなケースを招く可能性がある。

例えば、単身母国からデカセギに来る場合 や、今回のように家族がいても、長引く不況 で仕事がなく、生活に困窮し余裕がもてず、 家族と別れ、一人暮らしになるということも ある。

単身のうえに、年々仕事に体力が追いつかなくなる(1990年代の入管法改正から20年が経ち、50~60歳代も増加してきている)と、身体に支障が出てくるが、社会保険未加入のため、病院に行けない。同時に年金も未加入のため、働き続けるしかない。さらに日本語ができないとなると、生活保護など社会保障

サービスにアクセスできなくなる。

それに加え、団地等集合住宅で、同じ地域に外国人住民が住んでいてもコミュニティが形成されていない地域であると、互いに助け合うこともできず、最終的には地域とのかかわりがなく、孤立化し、将来に希望がもてなくなる、という悪連鎖が発生することも充分考えられる。

大島氏は「普段相談して来る人たちはまだ よいが、地域にはまだまだ、自分の悩みを相 談せず、国際交流協会などには来ない、見え ない人がいる。そういった人たちをどのよう に掘り起こすか、それが課題だ」と言う。

ことばの壁、制度の壁、現在の外国人労働 者を取り巻く環境などによる外国人住民特有 の課題に対応できる地域レベルのセーフティ ネットの体制や、情報体制が充分ではないよ うに思う。

これらを含め、広い視点で外国人住民と日本社会の接点について考えると、今回の若者を対象とした講座のように早い段階から日本におけるマナーや、日本の食生活、集団行動の方法など日本社会との接点をもつ機会をつくることがポイントとなってくる。これは決して外国人だから「支援」をするという意味ではなく、これから地域社会を担う住民の一員として地域で育成するために意味のあることになるであろう。

2日目、皆が楽しくバレーボールをやっているとき、1人離れて音楽を聴いていた日系ペルー人のH君(17歳)がいた。彼は日本に来てからまだ年数が経っておらず、現在は工場で働いている。他の子たちのように日本語を話すことが得意ではなさそうだった。私とバドミントンをやろうと何度か誘い、ようやくのってくれた彼と1時間ぐらい遊んだ。私が失敗するたびに「ダイジョウブ?」「ツカレタ?」と、片言の日本語で気を遣ってくれた。また、最後に駅のホームで別れるとき、皆に交じりながら彼だけが何度も振り返って私に

手を振ってくれた。私はそれを見ながら、彼の笑顔を少しでも見られてよかったと思うと同時に、これから苦労は多いだろうけどなんとかがんばって日本で幸せに生きていってほしい、そう念じていた。

i ここでいう、「外国にルーツをもつ子ども」というのは、両親または親のどちらかが外国籍の子もしくは、日本国籍であっても、親または本人が以前外国籍であったなど、文化や言語を含めなんらかの形で外国にルーツを有する子どもを指す。

ii 日本人の配偶者等や定住者の在留資格で滞在する外国人住民は日本での就労に制限がないことから、非熟練労働者として、間接雇用の形態で雇われている場合が多く、賃金・労働の問題や社会保険未加入などのために不安定な労働環境にある場合が多い。

著者紹介:

加藤 純子 (かとう・じゅんこ)

JIAM 多文化共生コーディネーター。7 年間多文化 共生関連の NPO で活動し、平成 21 年度より JIAM にて多文化共生コーディネーターを務める。

最終的には「地域みんなが元気になること」を目標 にして、多文化共生を考えている。

よろしくお願いします!